

### 第3章 発掘調査の方法

#### 【掘削作業】

今回の調査は、同志社小学校校舎部分について行われた。第1章に述べたように、調査区は校舎部分の全面にわたった。約4800km<sup>2</sup>程度の範囲にわたったが、地表面から約10～20cmの部分については、機械掘削によって堆積土を除去した。遺構面は、近世以後の耕作やグラウンド整備によってすでに削平されており、いわゆる遺物包含層は確認できない状態であった。そのため、機械掘削後の掘削面からすでに遺構が確認できる状態であった。機会掘削後、人力で遺構面精査を行うと、住居・柱穴・土坑・溝などが多数検出され、遺構埋土を人力で掘削することとなった。廃土置場が広く確保できなかったため、南北に調査区を分割し、反転して掘削作業・記録作業を行った。

#### 【測量基準・地区割】

調査に際しては、国土座標を用いた地区割り設定を行った。国土座標系については、2002年度以後、日本測地系から世界測地系へと移行が行われている。今回の調査は新基準である世界座標系に即してすべての測量作業を行っている。今回の調査地は、この座標体系上においては、第VI座標系上に位置している。また、水準については、東京湾平均海水準面を基準とする標高を採用している。

この座標系に基づけば、当調査区は、X=-103300～-103380m、Y=-19450～-19540mの範囲内に相当する。そこで、X=-103300m・-19540mを基点とした10mメッシュの地区割名称を設定して、調査を行った。同点を基準に、西側へ順に10mごとにA・B・C・D～Iの9区画、南側へ順に1・2・3・4～8の8区画の名称を与えた。各10m区画については、その組み合わせでA-1区・B-2区という呼称を与えた。

表5.01にみえる各遺構リストにおける所在地情報は、この区画に基づいた表現である。また、調査に際して遺物取り上げを行った際には、各遺物ラベルにこの地区割り名称を記入し、遺物取上げ単位で行った出土遺物登録作業にもこの地区割り名称を用いた。したがって、本書に掲載されていない出土遺物についても、その資料に貼付された遺物ラベルや、収納データはこの地区割りを利用した記載がなされ、最低10m区画単位での出土位置情報が復元可能となっている。

#### 【記録作業】

遺構情報の記録は、実測図と写真の2種類の方法を用いた。実測図については、一部を座標軸などに沿った基準線から手実測する手法をとったが、大半は(株)アジア航測による写真測量によって作成した。個別遺構の平・断面図に関しては最低1/10縮尺での実測精度を確保するようにし、遺構全体の平面図作成については、1/50縮尺の精度を保つようにした。

また、これとは別に、作業風景や遺構・遺物の検出状況、土層断面の情報などについては、35 白黒およびカラーリバーサルフィルム、ブローニー版の白黒およびカラーリバーサルフィルムによって撮影を行い。部分的にはデジタルカメラによる記録撮影も行った。

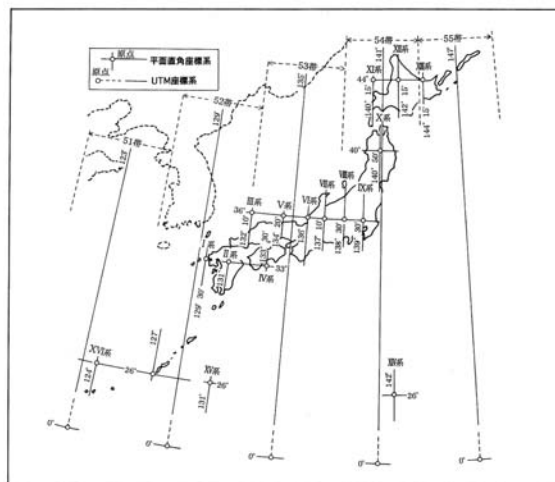


図3.01 国土座標系

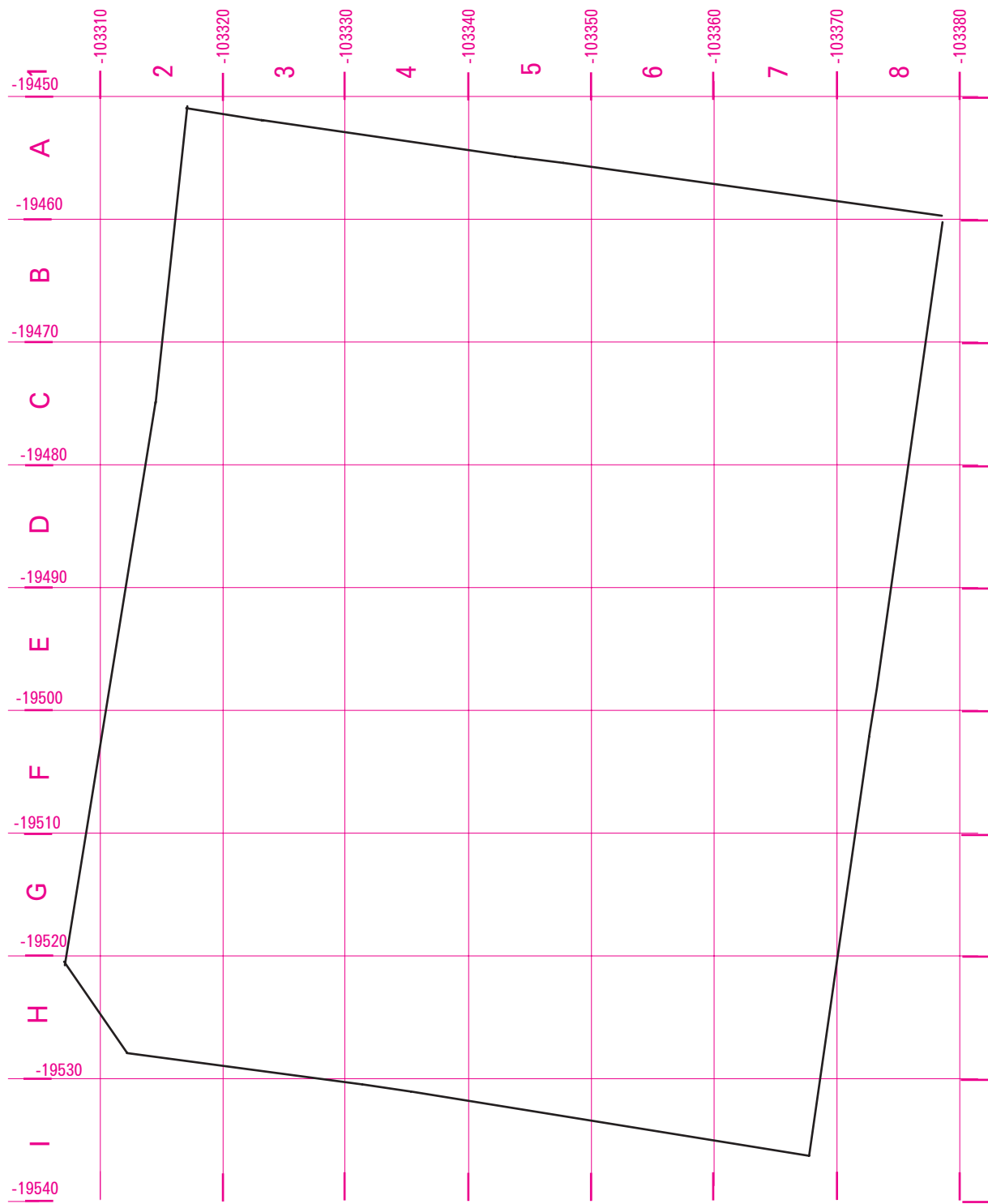


図3.02 調査区の地区割

## 第4章 試掘の概要と基本層序

今回の調査は、同志社小学校建設に伴い行われた。先述のように、2004年9月に、本調査に先立って試掘調査を行った。小学校予定地および、同志社高校の新たなグラウンドとなる地点がその対象地である。その成果の概要について説明し、本調査での深堀部の層序を概説することによって、本遺跡の基本層序を説明する。

### (1) 小学校予定地における試掘調査の成果

同志社大学歴史資料館では、2006年度開校予定の同志社小学校（仮称）建設予定に先立って、2004年9月6日～14日の期間に同志社高校の北グラウンドの試掘調査を行った。

この地点は、弥生時代後期・古墳時代初頭の土器が出土した「忠在地遺跡」に隣接している。さらに、同志社高校理科館建設時（1991年）の発掘調査時にも、古墳時代初頭の落ち込みや遺物、さらに古墳時代後期～古代の遺物が少量ながら検出された。また、同志社高校ができる以前の地図にみえる田畑の区画をみると、中世にまでさかのぼる条里地割が存在した可能性がある。実際に、条里地割を思いきラインに沿って現在でもグラウンドの北辺・東辺に直線的な土盛（土塁？）が残っている。近接する大成寮発掘調査時に古代の条里地割の痕跡を検出していることから、条里関連遺構に関しても小学校建設予定地に先立ち調査が必要と考えられた。

そこで、予定されている建設工事に先立って、1×5m程度の規模のいくつか小さな発掘調査区を設けて調査を行うことになった。現在、同グラウンドは放課後のクラブ活動の使用中であり、小学校校舎建設地点そのものを調査することはできなかったが、同敷地の周縁を調査することにより状況把握をめざすこととした。調査区の概略位置はすでに先章の図1.01に掲載している。

#### ①調査区

①調査区は、岩倉北グラウンドの南辺中央地点に位置する。表土から20センチ程度（1～2層）はグラウンド表土・整地層で、その直下から礫を多く含む層（3層）が確認された。その層の中からは摩滅した土師器や須恵器の破片が少量出土した。ただ、礫・砂が攪拌された状態で形成されているので、近・現代に周囲から持ち運ばれた整地層だった可能性もある。

さらに、下部には耕作土とも考えられる粘土層（4～6層）が30～40cm程度堆積している状況が確認できた。その下には、今度は確実な河川堆積と考えられる礫・砂層（8層）が確認できた。8層や、その上下層からは遺物は検出されず。当地点の基盤層と考えられる自然堆積層の形成時期については不詳である。

#### ②調査区

当調査区は、グラウンドの南東角にあたる。地表面から20cmほどの深さまでは、グラウンドの表土（1層）、その下に暗灰色系のシルト～極細粒砂層（2層）が確認された。その直下には5～10cm大の礫を多量に含んだ層（3層）が確認された。2層からは、江戸時代以後のものと考えられる磁器の破片が出土している。2層は江戸時代の耕作土と考えられ、3層は流水作用で形成された河道内充填堆積物層と考えられるが、全く遺物は出土しなかった。3層は硬くしまった状態であり、形成時期は不詳であるが古く遡る可能性もある。

また、条里もしくは耕作区画に関係する溝・畦畔などは検出できなかった。

## ③調査区

当調査区は、②調査区の30m程度北側に位置する。厚さ10センチ程度のグラウンド整地土（1層）を除去すると、褐色のシルト～極細粒砂層（2層）があり、その下に②調査区の3層に類似した礫を多量に含んだ層（3層）が確認された。2層には全く遺物が含まれなかったが、3層の凹み部に堆積・形成されていた。凹みは溝状なのか土坑状なのか判別がつかないが、主に東西方向に伸びるようにも見えたが、小調査区の端部で検出されたため形状は判然としない。2・3層共に遺物は出土せず、形成時期は不詳である。条里地割に沿った溝の可能性もある。また、3層はその上部40cm程度はしまりが悪く、流水堆積の互層単位も判然としない。上部40cm程度の範囲については耕作土・再堆積土・整地層などの可能性もある。

## ④調査区

当調査区は、北グラウンドの中央北辺地点に相当する。表土から40cm くらいの深さまでは耕作土（1～2層）と考えられるが、その直下から深さ1.5mまで礫と砂の互層（3層）となっていた。これも、②③⑦調査区で確認された流水堆積層と考えられるが、③調査区の3層同様上部50cm程度はしまりが悪く崩れやすい状態であった。きわめて新しい時期の堆積物の可能性がある。これらの礫層は、すぐ西側を流れる岩倉川の前身となる流路帯の痕跡と考えられる。遺物は、上部の耕土層から少量の土師器（古墳時代？）が出土した。古墳時代以前に、礫・砂層（3層）が形成されていた可能性はあるが、2層出土土器も二次的堆積による可能性がある。

## ⑤調査区

当調査区は、グラウンドの南西端という最も岩倉川に近接した地点に相当するが、予想通り、近世に機能したと推測される表土直下の耕作土層（4層）を切る状態で河道の肩部を検出した。流水堆積したと考えられる礫・砂（1・2層）で充填された河道は、現在の流路から5m程度東にずれた場所にやや異なる方向にのびる形状で検出された。現在の岩倉川は同志社高校の西側に南北方向に直線的に流れており、現在とおなじ川の形状が大正時代の地図にある。今回検出された河道痕跡は、このことから、近代に岩倉川の堤防が整備され現在のような形態に固定される直前の河道の一部が検出されたと考えられる。

上述のように河道の基盤となる粘土・シルト層（4・5層）は耕作土と考えられるが、地表下約120cmには硬くしまった砂層（6層）が検出された。当地点からは、一切遺物しておらず各層位の時期決定は難しい。

## ⑥調査区

当調査区は、北グラウンドの南西隅の地点に相当する。厚さ10センチ程度のグラウンド表土・整地土（1・2層）の下には黒褐色の粘質土層（3層）があり、ここには炭片や江戸時代の陶磁器片が多数含まれていた。今回の調査で初めて生活層とも思える土器包含層が確認できたことになる。

その下には耕土と考えられるシルト～粘土層と礫を多数含む層が互層（4～6層）となっていて、最下層には流水作用によって形成されたと考えられる粗粒砂～中粒砂層（7層）が確認された。近世の生活層が形成される以前には、この地点は水田もしくは畑だったと考えられる。

## ⑦調査区

当調査区は、グラウンドの北東端に相当する。③調査区と基本層序は類似するが、表土から30～40程度下の礫層（3層）中から、古墳時代初頭の土器片が出土した。出土したのは甕の破片で、球胴化頭



著で表面粗いタタキメの見える個体で、庄内式期の所産と考えられる。おそらく、3層は古墳時代初頭に形成されたか、もしくは周囲から流れ込んで再堆積したかのいずれかである。

ただし、当調査区では、古墳時代の生活層は確認できなかった。近接地点に古墳時代初頭の生活層からの流れ込みの可能性が高い。

## (2) 岩倉野球場の試掘成果

同志社大学が保有していた岩倉地区の野球場に関しては、同志社大学附属小学校建設による、同志社高校期グラウンドの代替地として、グラウンド整備工事が行われることとなった。この敷地のうち、北辺部については、最大と表面から50cm程度の削平を行い、現在の野球場敷地部分に関しては北辺部削平土を盛って整地して周囲に浅い排水溝をめぐらす造成工事が行われる予定である。その計画をうけて歴史資料館が北辺部の試掘を行った結果、この領域は地表から80cm程度の深度までは、近・現代の盛土造成が及んでいることが判明した。造成工事では、想定される条里遺構が破壊される可能性はないことが判明したが、施設完成後は半永久的に調査が不可能となることも予想されたため、一部について条里遺構の探索調査を行うこととした。調査地点は図1.01のとおりである。

## ⑧調査区

この調査区の西端では大正期の地図にうかがえる状況から、当初南北方向の畦畔検出が予測された。しかし、該当箇所は近・現代の攪乱によって破壊されていた。そこで大正期の畦畔よりもやや東よりの地点を精査すると、近代に形成された沼状環境下の植物遺体集積層の直下から、東西方向に伸びる畦畔が検出された。畦畔耕土やその直上層からは古代の所産と思しき須恵器片が出土した。ただし、出土土器片の摩滅が顕著なことなどから考えて、この畦畔遺構の形成時期を古代にまで遡らせるには確証が乏しい。ただ、大正期の地図には掲載されていない区画なので、近世以前の耕地区画を反映している可能性は高い。近～中世・古代いずれに帰属するかが問題の遺構である。



写真4.01 ③層上面東西方向畦畔



写真4.02 東壁土層断面



### (3) 本調査区深掘部での層序と全体の遺構形成

同志社小学校校舎部にあたる本調査区では、当初東西南北各辺の端と中央に合計 8 箇所、さらに調査区の中央に 1 箇所の合計 9 箇所に深掘部を設けて下層の堆積状況を確認した。各深掘部の規模は 5 × 5 × 1.5m である。その配置は図 4.02 に示している。概ね、試掘調査の成果と同じような状態で、浅いところでは、地表下 15cm 程度以下はすべて礫層となる状態であった。しかし、地点によっては、様相が異なっている。礫層の上部のシルト質層の厚さが 50cm 程度ある地点や、礫層中に部分的にシルト・粘土質層が形成されている地点があった。代表的な地点による堆積状況の差を示すために、図 4.03 に本調査区南辺の東西方向の土層柱状図を示した。

これをみると、礫層の上面は著しかったことがわかる。また、礫層上面が凹んでいると考えられる地点には、黄褐色シルト層がその上面に堆積している。試掘部の土層断面状況からも確認できたが、これら礫層は河川内堆積物の可能性が高い。また、本調査区北東隅の深掘部の礫層上部からは、図 6.08 に掲載した縄文後期時が出土している。このことから、礫層は縄文時代に激しい河川流水作用によって形成され、礫層堆積後の凹凸の顕著な面に弱い流水作用などによってシルト層が形成されたと考えるべきであろう。これらの堆積作用は、現在の岩倉川の流路が固定する以前の流路帯内部に起こった現象と類推される。

今回この 2 つの土質があらわれる平坦な面が、地表下約 10～15cm の土層に相当し、そこで後述する遺構群が検出されている。つまり、礫層の堆積後にその凹み部にシルト質層が形成され、後述する古墳時代初頭を中心とした遺構群が形成され、その後近世以後に削平を受けて平坦面が形成されたと考えられる。古墳時代初頭などの遺物包含層はその削平の際に消失したものと考えられる。また、この遺構検出面の上でも、後述する検出された遺構群の多くはこのシルト質層が分布する領域から検出されている。このことから、遺構が掘削しにくい礫層を避けて形成されていたか、礫層部分は削平前に高まり部を形成していて、その上面に形成された遺構が完全に削平されて残存しなかった可能性もある。

また、第 5 章にも述べるように、縄文時代中期末に形成された炉跡が 1 基だけ検出されている。このことは、この領域に旧岩倉川流路帯による堆積作用の進行していた縄文時代に、川のほとりに一時的に居留地が形成されていたことを示している。流水堆積層の上面に形成されていた複数の遺構のうち、削平を免れた炉跡が残存して、古墳時代初頭遺構群と同一面で検出されたものと考えたい。

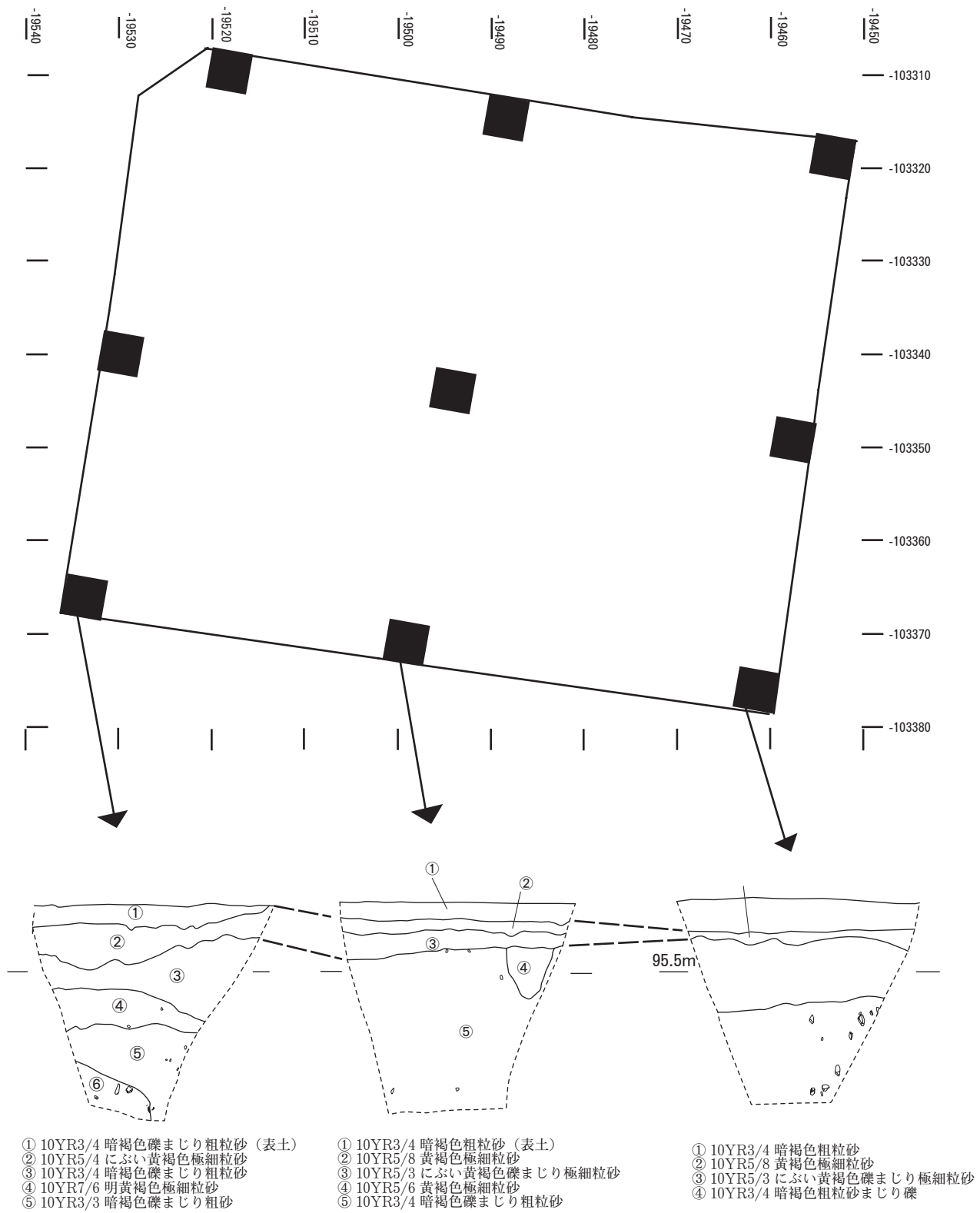


図4.02 深掘部土層断面